

Spenser 批評の流れ

——十七世紀後半から十九世紀：二十世紀批評の背景として——

有 路 雍 子

二十世紀に入って、Spenser の *The Faerie Queene* は、多くの批評家達の関心を引き続けている。彼等は夫々その Spenser 論で、アレゴリーの新しい定義を試みている。アレゴリーの再考によって、この詩の多種多様な要素を統合しうるアレゴリー観を見出し、アレゴリー文学として *The Faerie Queene* を再評価する必要性を感じているようである。このような今世紀の Spenser 批評の動向の背景には、十七世紀後半から十九世紀に亙るアレゴリー論、Spenser 批評がある。二世紀以上に亙る主だった流れを、二十世紀批評の背景としまとめてみたい。

1715年、John Hughes はアレゴリーを二つの型に分類した。⁽¹⁾ 第一は、本当の人間や、歴史上の人物によって構成される物語全体から、教訓が自然と生れてくるもの。第二は、感情や欲望や徳や悪に、目に見える形や行動を与えて物語を構成する擬人法である。この分類は当時のアレゴリー論をまとめるものであるが、批評家達は、主として第一の型を支持している。この傾向は、一つには想像力の問題に拘わると考えられる。1600年の半ば頃、Thomas Hobbes は、人間のあらゆる思考は感覚による経験から生じると唱え、この経験主義を基に文学創造を説明した。

Experience begets Memory; Memory begets Judgment and Fancy;
Judgment begets the strength and structure, and Fancy begets the
ornament of a Poem.⁽²⁾

感覚によって経験される事象は、すべて記憶に留められる。想像力(fancy)は感覚しうる類似に従って、描こうとするものの為に、記憶の中から際限

なくイメージを集め、判断力は、自然の中に働く秩序、原因、相違、類似を見出して、これらに従って自然の理から逸脱しないように、想像力の働きを抑制する。Thomas Rymer は、Hobbes の判断力を、蓋然性及び理性又は常識と呼ぶ。⁽³⁾ 文学は、特殊性や非蓋然性を一切排除した自然の忠実な模倣である。このような考え方は他の批評家達にも支持されていた。したがって、抽象の擬人は実在せぬもので、当然受け入れ難い。又、アレゴリーは叙事詩と結びつけられ、William Davenant,⁽⁴⁾ Richard Blackmore,⁽⁵⁾ Thomas Hobbes,⁽⁶⁾ Thomas Rymer,⁽⁷⁾ John Dryden⁽⁸⁾ 等の批評家達は、*The Faerie Queene* をその観点から批評している。Blackmore は叙事詩の条件として、主として次の点を上げる。中心となるアクションが一つあり、その他のアクションはすべてこれに付随すること。詩全体が、原因結果の関係で緊密に結ばれ、主人公とそのアクションは、歴史的に有名で重要であること。アレゴリーの点でも一貫していること。このような条件の下では、擬人を用いることは難しく、実際 Blackmore は、人物や行為の一つ一つが抽象のレベルを有している必要はなく、物語全体を通して、重要な意味が示されれば良いと述べている。逆に考えれば、アレゴリー文学は、その物語の面で、以上のような条件を満すことを求められていると言える。この観点から、実際 Blackmore や Dryden は *The Aeneid* を最もすぐれたアレゴリー文学と考える。上記の批評家達は、このような考えの下で、一様に *The Faerie Queene* に統一と蓋然性が欠けていると指摘し、Davenant は “...a continuance of extraordinary Dreams... in the beginning of Feavers....”⁽⁹⁾ と非難し、Blackmore は、その荒唐無稽さを次のように批判する。

...[Spenser] hurried on with a boundless, impetuous Fancy over Hill and Dale, till...lost in a Wood of allegories,—Allegories so wild, unnatural and extravagant, as greatly displease the Reader.⁽¹⁰⁾

一方、Alexander Pope⁽¹¹⁾ や Joseph Addison⁽¹²⁾ は、アレゴリーは擬人で

あると主張する。John Hughes は前述のように、二つの型を認め、*The Faerie Queene* は擬人の型に属すると考える。ここでは、實在せぬ、現実不起り得ぬ様々な存在とその行為は、その一つ一つの抽象的意味の故に容認される。

しかし注目すべきことは、*The Faerie Queene* を、アレゴリーの問題を離れて評価する動きが、すでに見え始めていることである。指摘されるいくつかの欠点にもかかわらず、Edward Phillips⁽¹³⁾ は、この詩のもつエネルギーの点で、Spenser を最も優れた詩人の一人と考える。詩のエネルギーは、詩に生命を与え、荒削りの洗練されない古めかしい言葉の中で輝き、洗練された詩には失われがちなものである。Abraham Cowley⁽¹⁴⁾ は、これを騎士・巨人・怪物・妖精・神々・悪魔の活躍する楽しい物語として読み、Richard Graham⁽¹⁵⁾ も Spenser の自由な想像力を称える。Dryden の立場も微妙で、一方で Spenser が叙事詩の規則を守らなかったことを遺憾としながら、*Bower of Bliss* の魅力を次のように語っている。

And I will ask anyman who love heroic poetry...if...the Enchanted Wood in Tasso...and the Bower of Bliss in Spenser...could have been omitted without taking from their works some of the greatest beauties in them.⁽¹⁶⁾

描かれたイメージを評価する上での Dryden の原則は、それが人間の感情に与える効果である。美しく強烈なイメージは、読者の心に激しく働きかけ、その感動は長い間心に残る。それ故、肝腎なことは、その詩人がいかに規則を守ったかでなく、このような激しく美しいイメージを創造できたかどうかにあると、彼は言う。妖精をはじめとした民間伝承に残る様々の空想上の生き物は、このイメージの要求に応えるものである。優れた詩人の想像力は空高く舞上り、様々な美しいものを造り出す。Dryden は *Bower of Bliss* の中にこうした美の世界を見出している。John Dennis⁽¹⁷⁾ は、読者の心を、日常性からもっと強く激しく崇高なものに目覚めさせる

強烈な力を、Spenser に認めている。Hughes や Addison は前記のように、抽象的な意味に置換えることができるという理由で、Spenser の自由奔放な想像の世界を是認している。したがってアレゴリーは重要視されているようであるが、物語のレベルへの興味の方が勝っているように思われる。Addison⁽¹⁸⁾ は、美しいもの、壮大なものが魂に与える効果に関心を向ける。美しい光景は、魔法のような力で、魂を揺り動かし、快い恍惚状態へ導く。壮大な眺めは、心地好い静寂と驚きの念をもたらず。魂は、これら喜びや讚嘆や驚きの気持をとらして、自然の限界を越えた想像の世界へ運ばれていく。そこでは魔女も魔法使いも妖精も、抽象概念の擬人化されたものも、自由自在に活躍することを許される。詩の世界はこのように自然の制限を越えた、まったく新しい世界である。Spenser において Addison が楽しむのは、彼の荒唐無稽な想像の産物である。彼と同様、Hughes⁽¹⁹⁾ も Spenser の驚異的な豊かな想像の世界こそ、真の詩人の才能を示すものと称える。さらに彼は、*The Faerie Queene* のゴシック的要素を指摘し、古典的統一の観念と異った、ゴシック文学特有の、多種多様な部分部分にある変化に富んだ面白さを、この詩の中に見出している。そこには叙事詩のもつ壮大さ素朴さではなく、美と洗練されぬ荒々しさとの奇妙な、しかし楽しい混合が見られる。Spenser は、彼の想像力を縦横無尽に駆使する為に、ゴシック的な物語を選んだと、Hughes は考える。Addison や Hughes においては、アレゴリー文学の抽象的なレベルは二次的なもので、もう一つのレベルである荒唐無稽な、しかし魅力的な物語の世界が、想像力という観点から評価され、楽しまれていると言えよう。又、Hughes は詩から引用しながら、この詩特有の詩的美しさを具体的に示した最初の批評家でもある。

Addison, Hughes の批評の傾向は、さらに十八世紀後半の代表的な Spenser 批評家達に受継がれ、強められていく。John Upton⁽²⁰⁾ は、想像の世界は現実と異った蓋然性を持ち、それを信じさせるかどうかには詩人の

能力があると説く。Spenser の詩の世界は、独自の真実性を持つ。しかし Spenser は、彼の詩の世界を尚且つ信じようとしなない読者の為のアレゴリーを試みたのであると彼は考える。つまり彼は、*The Faerie Queene* の彼の版の序文や注で、道徳的、歴史的意味を説明しているが、アレゴリーを単に付随的な手段と見なしていたことになる。言換えれば、Spenser の意図は道徳を伝えることでなく、現実の世界を離れた自由な想像の世界の創造にあったのである。しかし Upton は想像の世界といえども、Prince Arthur が Gloriana の幻に恋して探しに出かけるという一連の筋に、一応の統一があると弁護している。Richard Hurd²⁰¹ の関心は、この詩のゴシック性にある。*The Faerie Queene* の統一は、いくつかの冒険がすべて Faerie Queene の宮廷に始まり、そこで完結するというゴシック的統一である。彼はゴシック文学に深い理解を示し、それが古典的叙事詩と比較して勝れている点を三つ上げている。素朴な古典叙事詩と異り、洗練されたシーンや描写に満ち、愛、友情というような人間的なやさしい感情を描いていること。様々な国々、異国の風習や政治を扱っていることで、変化に富み、壮厳さももっていること。第三に妖精や魔法などの空想上の事柄が、ゴシックの世界に相応しく、奇蹟の類が容易に読者の心に入りこみ、魅了してしまう。詩の世界では、人間の実際の体験でなく、想像力が問題であるという考え方がここにも見られる。Thomas Warton²⁰² は、騎士の冒険物語は虚構でなく、中世封建社会の制度に基く真実性をもつもので、とりわけ *The Faerie Queene* の物語は、真の抽象意味をもつアレゴリーであることを一応強調している。彼も二つの型のアレゴリーを認め、Spenser は両方を用いているが、彼の才能は擬人にあると考える。これは Spenser 当時に流行したスペクタクルの影響によるところが大きいとする。彼は、アレゴリーについて論じてはいるが、大胆なイメージを生み出す “...careless exuberance of a warm imagination and a strong sensibility”²⁰³ に強く魅れていることは明らかである。

If there be any poem, whose graces please, because they are situated beyond the reach of art, and where the force and faculties of creative imagination delight, because they are unassisted and unrestrained by those judgment, it is this.²⁴

彼は、スタンザ、言葉、韻律等にも注目し、描写を豊かにし強める効果をもつ長いスタンザの使用や、一つのスタンザ内の数種の押韻、古風な言葉がかもしだす一種の威厳、生き生きした滑らかな韻律、流麗な音などを高く評価している。

以上のように、十七世紀後半から十八世紀の批評の動向を見ていくと、*The Faerie Queene* はアレゴリー文学であることは認められながら、批評家達の議論は、抽象を離れた物語の面、あるいは純粹に詩的な要素を中心としたものになりつつあることがわかる。Edmund Burke の *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful*²⁵ は、文学批評の原則の探求で、Spenser への言及はわづかであるが、文学批評の根本概念の変化を明示してくれる。彼は想像力の土台を擬古典主義者と同様、感覚の経験におくが、事象そのものでなく、それが人間の心に与える効果を文学の本質と考える。Dryden や Addison の考え方にもこれは窺えるが、Burke は彼等よりさらに前進して、詩とは事象の正確な描写でなく、それが話し手やその他の人間に与えた効果を描くものであると説く。この効果は二つの感情、即ち壮美感(the sublime)と、美感又は愛に分類される。言葉を媒介として、これらの効果をいかに伝えるかが詩の役目であって、事象の正確かつ詳細なイメージを提示することではない。壮美感は主として恐怖から起る。その効果的方法は、不鮮明な曖昧なイメージか、不安定なイメージを描くことである。この不安定なイメージと関連して、Burke は *The Faerie Queene* Bk II の Cave of Mammon の数行に言及し、そこに描かれる揺めく仄暗い光は、真暗闇より一層恐ろしく感じられ、不安や危機感を強めて効果的であると述べてい

る。一方、小さなもの、滑らかなもの等のイメージは、美感、又は愛を感じさせる。この場合も詳細で正確な描写は役に立たず、Spenser の Belpheobe の描写は素晴らしいものはあるにしても、細かすぎて、美の効果を妨げていると批判している。Belpheobe の表す抽象概念は評価の対象とはならず、ここにアレゴリーはその価値を失うことになる。

このような流れの中であって、Samuel Johnson は、擬人は教訓を伝える方法として、大変楽しい美しいものであると弁護している。しかし彼の言うアレゴリーは限定されたもので、抽象の具象化であるものに、物語的機能を与えることを否定している。

Thus Fame tells a tale, and Victory hovers over a general, or perches on a standard; but Fame and Victory can do no more.²⁶

物語的機能を与える場合、もはやそれは抽象の具象化でなく、本当の人間になってしまうからである。この点は、二十世紀の批評家達がアレゴリーを考えるにあたっての、一つの問題にもなっている点である。

十八世紀末頃から、アレゴリーとシンボリズム又はその他の文学様式との比較論が盛んとなったことは周知のことである。これは、William Blake, S. T. Coleridge を中心とし、後には W. B. Yeats に受継がれ、さらに二十世紀の批評家達である C. S. Lewis, W. B. C. Watkins, Graham Hough, Northrop Frye などにも、何らかの形でその影響が窺える。この比較論の根底をなすのは、彼等が信じる想像力である。Blake や Coleridge は、感覚によって体験される事象が、取捨選択されることなく、記憶されるという考えを否定する。彼等は人間の魂の、感覚からの完全な独立を主張する。Blake²⁷ は、心の眼は常に永遠不変の存在を見たいと願い、肉体の眼を離れてこの世のあらゆる事象の中に、感覚を越えた実体を直感的に見ることができると唱える。このヴィジョンを見る力が想像力である。それに対して、アレゴリーは感覚の産物である。道徳なるものが、本来、感覚の経験から帰納されるもので、アレゴリーは、外面的類似によってイメ

ージを結び合わせるという、機械的方法により、この道德観念を擬人化する。つまり、それは影のまた影を造り出すものにすぎないと、彼は言う。Coleridge²⁸⁾ は、人間が現象界に接した時、意識するにせよ、しないにせよ、人間の内なる存在が自己を表現するイメージを現象の中から選択すると考える。その選択の媒介は、激しい感情の働きである。言替えれば、様々な事象は、それを見る者の感情的反応をとらして、自己の内的な世界——それは彼にとって窮局的には永遠なるものの一部である——のシンボルに変えられる。こうして選択され記憶されたものは、再び内的な働きによって集められ、結びつけられ、変えられて、まったく新しい詩の世界を創造する。これが想像力であり、シンボリズムは想像力から生れる。アレゴリーは、感覚が集めたデータに基いてのイメージの機械的な排列であるとする点は、Blake と同様である。それは空想の範疇に入る。

Allegory is nothing but a translation of abstract notions into a picture-language which is itself nothing but an abstraction from objects of the senses; the principal being even more worthless even than the phantom proximity, both alike unsubstantial and the former shapeless to boot.²⁹⁾

Shelley³⁰⁾ にとっては、詩作とは何の前触れもなく一瞬訪れ、次の瞬間消えてしまうインスピレーションである。彼が熱情を燃す愛や友情や愛国心や徳や悪の問題は、予め体系化され準備されている道德ではなく、このようなインスピレーションの瞬間と密接に結びついたものである。したがって、彼は Spenser が道德的目的を前もって持っていて、体系化された観念を強要したために、詩的效果が損われてしまっていると非難する。そしてこの主張はアレゴリーへの批判とも受けとれよう。

アレゴリーは道德的抽象観念に形や行為を与える擬人であり、このように批判を受けた。Blake も Coleridge も、Bunyan の *The Pilgrim's Progress* をアレゴリーとは考えず、Blake はヴィジョンと見なした。³¹⁾ Coleridge は、作者がアレゴリーにしようとして、登場人物に奇妙な名を

与えたが、擬人ではなく、本物の人間になっていると評する。*Divine Comedy* も彼にとってはアレゴリーでなく、実在した人物をとらしての、道徳的、宗教的、政治的教訓であり、たとえば地獄の描写はシンボリカルな価値をもっている。⁽³²⁾ J. R. Lowell⁽³³⁾ はこの点について異った意見を示し、*The Pilgrim's Progress* をアレゴリーの範疇に入れ、*The Faerie Queene* より遙かに優れていると言う。彼は *Odyssey* を最も優れたアレゴリー文学とし、これは意味を無視して、純粹に詩として読めると高く評価する。これらの作品を容認できるアレゴリーとしようが、アレゴリーでないと考えようが、本質的には同じ考え方である。抽象があつて、それを具象化するということを彼等は好まない。抽象觀念そのものが無意味である上に、具象化する作業もまた空である。

このような考え方に基いて、*The Faerie Queene* において、明らかにアレゴリカルである部分は、最も退屈な部分として非難を受けている。他の部分は、アレゴリーでないか、もしくは、その美しさ面白さを損うことなく、アレゴリーを完全に無視できるのである。批評家達が高く評価するのは、これらの部分である。

For instance, when Britomart, seated amidst the young warriors, lets fall her hair and discovers her sex, is it necessary to know the part she plays in the allegory, to understand the beauty of the following stanza?⁽³⁴⁾

アレゴリーを離れて、Coleridge が愛したのは、この詩全体を包むやさしさ、落ち着き、メランコリックな優雅さである。詩全体を一貫して包むこの雰囲気は、Spenser の想像力を示し、彼の安定した内面性を映し出す。熱狂的な騒しい心は、想像力の欠如に起因し、感覚が受けた印象を拠り所にすることから生じる。換言すれば、次のようなことを意味する。

The absence of all foundation within their own minds for which they yet believe both true and indispensable for their safety and happiness
....⁽³⁵⁾

確固たる内面性は想像力の基礎であり、これを備えた詩人の作品には、常に一様な安定した穏やかさが流れている。彼はこのような優れた詩人として、Chaucer, Spenser, Shakespeare, Milton の四人を上げる。Spenser の擬人に関して、彼が好意を示している点がある。⁹⁶⁾ 擬人ではあるが、時々すぐれた人物を Spenser は造り出すことがあると言うのである。例えば Talus である。彼はおそらく、Artegall が Radigund に屈服したという知らせを Britomart に告げようとする Talus を指しているのであろう。Talus はこの知らせを伝えることを悲しみ、唯彼女の前で沈黙し、心の中でふるえている。この時、Talus には読者を感動させずにはおかない人間性が備わっている。Coleridge は Spenser に “imaginative fancy” を認めているが、このような人物の創造がそれにあたるのであろう。

Wordsworth の *The Prelude* には、Spenser を称える数行がある。

Sweet Spenser, moving through his clouded heaven
 With the moon's beauty and the moon's soft pace,
 I call him Brother, Englishman and Friend!⁹⁷⁾

月光は Coleridge においては、想像力のシンボルであり、Wordsworth も、創作にとっての理想的な心の状態を「月」をとらして表現していることから、Spenser がここで高く評価されていることが窺える。彼は若者の自然への熱病のような没入を否定はしないが、真の想像力には、成熟した知性を持った、感覚に依存しない冷静な心が必要で、それが備わった時、想像力は自然の事物の外形に囚われず、詩人の内面を映す新しい世界を創造すると考える。この観点から、彼は聖書の抒情的詩と Milton と共に、Spenser を “enthusiastic and meditative Imagination”⁹⁸⁾ の宝庫であると称える。*The Prelude* には Spenser からインスピレーションを受けて書かれたと考えられる個所があるが、彼が Spenser の詩をどのように読んだかを知る上で面白い。それは彼の幼年時代の経験を描いたもので、山中ではぐれ、恐れながら一人さ迷っているうちに、昔、絞首刑が執行さ

れ、罪人の名を芝に刈り込んだ跡のまだ残っている所に来る。彼は恐怖のため逃げ出す。その時見た山の情景を次のように歌っている。

Then, reascending the bare common, saw
 A naked pool that lay beneath the hills,
 The beacon on the summit, and, more near,
 A girl, who bore a pitcher on her head,
 And seemed with difficult steps to force her way
 Against the blowing wind....⁽³⁹⁾

この時の暗い淋しい不安な思いは、見慣れた荒野のあらゆる眺めを、彼の言う“visionary dreariness”に変えてしまう。*The Faerie Queene* BkIで、Una は同じ状況に置かれる。騎士に捨られ、山のふもとをさ迷い、踏ならされた道を辿るうちに、肩に壺をのせた少女の姿を見る。

Till that at length she found the trodden gras,
 In which the steepe foot a mountaine hore ;
 The same she followes, till at last she has
 A damzell spyde slow footing her before,
 That on her shoulders sad a pot of water bore.⁽⁴⁰⁾

Janet Spens は、二つの詩における精神的経験を次のように説明する。

...the mental experience of one gone astray in the twilight of
 superstitious instinct and wandering among the grey chill shadows
 that cling to the by-ways of the mind....⁽⁴¹⁾

おそらく Wordsworth は Spenser の上記の個所に、Una のこのような内的体験を読みとったのであり、Spens がさらに指摘するように、迷信から生れる恐怖心の擬人としての少女、無知な迷信の世界を造りあげる要素としての荒涼とした光景などは考えなかったであろう。

同じロマン主義者の中にも、Spenser 批評には大きな変化が見えはじめる。Hazlitt が好むものは、Spenser の豊富で変化に富んだ、時には淫らとも思える程官能的な美のイメージである。*The Faerie Queene* は楽し

く美しい様々な形や色彩に満ちた、気ままに訪れて楽しめるギャラリーである。Hazlitt は、Spenser の飽くことを知らぬ美への憧れを強調する。美しいものに刺戟されると、Spenser は尽きることない想像力の衝動に身をまかせ、次々と泉のように湧出るイメージを追いかける。こうして Spenser は俗世間の悩みを一切忘れて、楽しい白昼夢に耽る詩人である。Prince Arthur のかぶとの前立てを、多くのイメージで飾りたて、隠者の庵さえ、極端な位官能的で洗練された所にしてしまう。彼は又、Spenser の言葉や音楽的要素に興味を示し、それらが詩人の美的感覚と結びつき、「読者の感覚を麻痺させ、俗世間の喧噪を完全に忘れさせる」⁽⁴²⁾ と述べている。彼の Spenser には、Coleridge の沈着でメランコリックな、深い内面性を感じさせる Spenser も、Wordsworth の知的成熟をもった沈思する Spenser も感じられない。それは美に魂を吸い込まれ、美のイメージの連想に耽る感覚的な若者としての詩人である。Leigh Hunt の Spenser 観も Hazlitt に近く、彼を“poetical boy”にしている。

...a poetical boy, let loose into a field, looking about with a determination to enjoy everything he beholds...and to give himself up to the dreams of books, of romance, of mythology, of whatsoever is remote from the prose of human affairs.⁽⁴³⁾

彼は Spenser の詩を、いわゆる“art for art's sake”の典型と見なししている。Lowell の批評も Hazlitt, Hunt の流れに属し、Spenser の詩を“sensation passing through emotion into revery”⁽⁴⁴⁾ と評し、Spenser の言葉に関して、彼は意味の為にではなく、美の為に言葉を選んだと述べている。John Keats は特に批評は残していないが、詩の中で Spenser を称えている。

And always does my heart with pleasure dance,
When I think of thy noble countenance:
Where never yet was aught more earthly seen
Than the pure freshness of thy laurels greene.

....

That I will follow with due reverence
 And start with awe at mine own strange pretence.
 ...so I will rest in hope
 To see wide plains, fair trees and lawny slope :
 The morn, the eve, the light, the shade, the flowers ;
 Clear streams, smooth lakes, and overlooking towers.⁽⁴⁵⁾

第三、第四行は、朽ちることのない詩人の名声を指しているのであろうが、Keats の見た Spenser の詩の特質を示すとも考えられる。実際、この詩には、Spenser に続いて、美と喜びのシーンの数々を歌っていくという Keats 自身の決意が語られている。“O, for a life of sensations rather than of thought!”⁽⁴⁶⁾ これが Keats の信条であり、それは又、“Chamber of Maiden-thought”⁽⁴⁷⁾ と呼ばれ、ここで楽しい驚きだけを体験し、その喜びに永遠に浸ることを彼は願っている。感覚による一つの美の体験は、過去の同じような多くの体験の蘇生をうながし、過去の多くの美の体験が、一つの新しい体験にどっと押し寄せてくる。この豊かな連想の流れに身を委ねることが、彼にとっては、本質的には詩なのである。J. R. Caldwell はこれを次のように説明している。

First, object of nature: May flowers, a filbert hedge, a spring with bluebells, marigolds, sweet peas “on tip-toe for a flight,” a brook with minnows, staying their bodies against the current. Then, a girl with auburn hair. The maiden gives place to a tuft of evening primroses; evening brings the moon, maker of poets, which suggests surmises on the origin of myth, which leads to the tale of Psyche, to Pan, and Syrinx, to the ancient poet who, like the present one, stood in a sweet spot and fancied the story of Narcissus. Narcissus takes the mind to Diana, to rapturous speculations on her bridal night.....⁽⁴⁸⁾

同様の特質を、Hazlitt や Hunt や Lowell は Spenser 的なものとして、*The Faerie Queene* において指摘していた。特に上記の Caldwell の

Keats 批評は、美しい自然やロマンスや神話の世界に遊ぶ、Hunt の Spenser を思い起させる。こうして耽美主義的な観点からの Spenser 批評が確立されていく。

これらロマン主義者達によるアレゴリーを離れた批評と同時に、彼等に対する批判やアレゴリーに向う批評が徐々に育っている。Scott は自伝に、若い頃アレゴリーを念頭に置かず、*The Faerie Queene* の物語に読み耽ったと書いているが、⁽⁴⁹⁾ 後にはこの詩には普通の読者には一読では得られぬ意味が別にあることを指摘している。⁽⁵⁰⁾ John Keble⁽⁵¹⁾ は、自分達の興味のみを追求して、故意にアレゴリーを無視しようとしているとして、ロマン主義者に批判を向けている。悪に対して Shakespeare の皮肉な目も、Milton の峻厳さも持たぬ Spenser にとって、アレゴリーは重要な拠り所であると Keble は受けとっている。悪に寛大になりがちであるという自分の性格を熟知していた Spenser は、アレゴリーを自分に課した歯止めとし、自分の立つべき所を明らかにしていると彼は述べている。*The Faerie Queene* を現実から隔絶した白昼夢とする批評に反撥して、Charles Lamb⁽⁵²⁾ は、偉大な詩人と平凡な詩人との相違を次のように説く。たとえば Cave of Mammon のような途方もない夢にも、実人生の持つ厳粛さを与えるのが偉大な詩人であり、人生を単なる夢物語に変えてしまうのが平凡な詩人である。*The Faerie Queene* に一貫して働いている Spenser のこの厳粛な意図を見落すことは、彼を二流の詩人にしてしまうことである。一見ロマンティックな物語の中に流れる神聖な目的には、John Wilson⁽⁵³⁾ も注目する。Matthew Arnold⁽⁵⁴⁾ はロマン主義とは異った観点から文学を論じ、文学とその時代の最良の思想との密接な関係、文学がそれに働きかけていくことの必要性を主張する。この観点から、Wordsworth, Keats, Coleridge, Scott は、自分だけの世界に閉じこもっているという非難を受け、それに対して、Shakespeare, Spenser は、優れた批評精神をもって、日常の喧噪の中から最良の時代精神を見極め、創

造的想像力でそれに働きかけていくという偉大さを認められている。John Ruskin の態度は曖昧である。彼は *The Stones of Venice* の付記に、*The Faerie Queene* のアレゴリーの解釈を試みている。⁶⁹ しかし彼自身は、ゴシック芸術に造詣が深く、シンボリズムとの比較でアレゴリーを軽視する点でロマン主義的である。彼はゴシック建築の特徴から、当時の人々の道徳的性格を考察し、ゴシック建築は、人間の墮落を素直に認識し、神の恩寵に縋ろうとする従順な信仰心を如実に示していると述べている。同時に、ゴシック建築の多種多様を好む傾向は、神に近づこうとする飽く無き願望の現れと考える。これらは、想像力に恵まれた人だけが悟ることのできる深い真理である。一方ルネッサンス時代の人々は、人間の墮落を否定し、徳を階段状に体系づけ、この階段を最上段まで上ることによって、人間が完全になると考える。徳は固定化され形式化された。Ruskin は、ルネッサンスの道徳規範の体系化を、彼等の擬人を好む傾向と関連づけ、この結果、アレゴリーは様々な分野で盛んになったと説明する。それはシンボリズムと異って、遊びの一種にすぎない。このアレゴリー批判はロマン主義的であるが、彼は Dante と Spenser を例外とする。彼等の詩は、熱心な信仰心を原動力として生れた、壮麗で美しいアレゴリーである。⁶⁹ 彼が *The Faerie Queene* のアレゴリーの解釈を試みたのはこう理由によるのであろう。

これ以後、*The Faerie Queene* の人物や出来事の抽象的な意味を追求する努力が、批評家達に見出される。Thomas Keightley, Frank Howard, R. W. Church, J. E. Whitney, K. M. Warren⁶⁹ 等の名前があげられる。その批評の傾向を次の例から窺うことができる。

No sooner are the knight and lady before us than “the day with clouds was suddeine overcast,” and “an hideous storme” drives them to take refuge in the Wood of Error; there after wandering the labyrinth about they come to the den of the Dragon Error. To my mind this tempest represents the beginning of the Reformation....

Even with Una and the Dwarf, or Truth and Prudence, for guides, it was impossible for the Christian Knight to avoid all paths of error. But when error takes the substantial form of a Dragon the Knight can attack it and aims a good stout blow at the monster....⁶⁹

人物や出来事のこのような抽象への翻訳は、しかしながら、この物語自体が持つ美や面白さを犠牲にすることである。過去の批評を通して二つの読み方が示されている。それは Edward Dowden⁶⁹ の言葉を借りれば、騎士や貴婦人、サラセン人、魔法使い、道化、野人等が次々と目前を通りすぎていく美しく楽しいページェントなのか、それらは単に外皮のようなもので、それらを剥ぎ取って抽象を露にすべきかという問題である。彼の Spenser 論の題 *Spenser, the Poet and Teacher* は、彼の基本的態度を明示している。彼は Spenser の課題を、彼の時代の二つの相反する動き、即ち一方は古典の復興と人間とその生活への強い関心の芽生え、他方それらの傾向に対する宗教的、道徳的反動の二つの極の調和であったと見る。これら二つは Spenser 自身の内的矛盾でもあった。アレゴリーは、これら矛盾する二つのものの融合である。彼の優れたアレゴリーは抽象の露骨な擬人ではなく、“a living creature...of a reasonable soul and human flesh subsisting”⁶⁹ であると Dowden は述べている。したがって Dowden は人物を抽象に置換えてみることはしない。彼等は生きた人間である。Una は、堅固な忍耐と騎士への揺ぎない愛情をもっているにもかかわらず、一抹の淋しさ、弱さを感じさせるやさしい人間である。⁶⁹ Spenser はこのような人間性のある登場人物の様々な冒険をとらして、本当の美は何か輝くようなものをもった美であり、人生は戦いであることを示していると Dowden は評価する。

Dowden とほぼ同じ頃、即ち十九世紀末、H. E. Greene がアレゴリーとは何かの問題にとり組んでいる。⁶⁹ 彼はアレゴリーと擬人とは違うとはっきり言いきる。アレゴリー的人物は、抽象的意味の他に、生きた本物の

人間として物語を構成しているという面を完全に持っていなければならない。抽象が単に動いているのではなく、完全に肉体を持った人間であることを強調する点で Greene と Dowden は一致していると言えよう。さらに Greene は、物語としての秩序ある発展を要求し、物語の発展上必要であるが、抽象的意味と関係のない状況に人物がおかれて、抽象的意味が中断されるのもやむを得ぬことと見ている。彼は Ruskin のシンボリズムの定義——“Symbolism is the setting forth of a great truth by an imperfect and inferior sign.”——を引用して、優れたアレゴリーは、シンボリズムの領域に足を踏み入れ、その意味は暗示的であり、限りない広がりや深さを持つようになることと論じる。抽象から出発はしても、想像力で人間性を十分与えられ強調されて一つの物語の世界を創造すれば、その意味はシンボリックになっていくのは当然かもしれない。ロマン主義によって二つの反対の極におかれていたシンボリズムとアレゴリーが、ここでは隣合って重なり合う部分を持つという考え方に变化しており、又、二十世紀の Watkins や Hough の考え方の先駆けが見られるのは興味深い。*The Faerie Queene* に関しては、物語の面で脱線が多く、結末への秩序だった発展に欠けていること、道徳的霊的アレゴリーと歴史的アレゴリーの二つを扱っていることで互いに妨げになっていること、Error, Despair, Sansloy というような単なる擬人が多く、完全なアレゴリーになっていない部分が多いことなどを指摘している。しかし又それは、人生は戦いであり、その戦いに騎士の精神をもって向っていくべきであるという真理を絶えずシンボリカルに示している点で、優れたアレゴリーでもあると Greene は評価している。

我々はこの Dowden や Greene の時点で、Spenser の *The Faerie Queene* を中心としたアレゴリー論に、過去の批評や論議のある程度の集大成を見ることができないのではないだろうか。擬古典主義の擬人を好まない考え方も、物語の面への限りない興味も、耽美主義的興味も、アレゴリーとシンボリズムとの関係も包括されるように思われる。二十世紀に入っ

て、アレゴリーはもっともっと幅を広げられ、柔軟なものと考えられるようになる。それは *The Faerie Queene* の中に見られる多種多様な変化や一見矛盾にみえるものを包含しうるものとされていく。そしてこのような二十世紀の流れの出発点のようなものが、このあたりにすでに見られると言ってよいのではないだろうか。

注

- (1) John Hughes, "An Essay on Allegorical Poetry" (1715), *Spenser: The Critical Heritage*, ed. R. M. Cummings, R. K. P., 1971.
- (2) Thomas Hobbes, "Answer to Davenant's *Gondibert*" (1650), *Critical Essays of the Seventeenth Century Vol. II*, ed. J. E. Spingarn, Oxford U. P., p. 59.
- (3) Thomas Rymer, "Preface to Rapin" (1674), "Tragedies of the Last Age" (1678), Spingarn, *op. cit.*, Vol. II.
- (4) William Davenant, "Preface to *Gondibert*" (1650), Spingarn, *ibid.*
- (5) Richard Blackmore, "Preface to *Prince Arthur*, an Heroick Poem" (1695), Spingarn, *ibid.*, Vol. III.
- (6) Hobbes, *op. cit.*
- (7) Rymer, *op. cit.*
- (8) John Dryden, "A Discourse concerning the Original and Progress of Satire, Prefixed to *The Satires of Juvenalis*, Translated" (1693), *Of Dramatic Poetry and Other Critical Essays Vol. III*, ed. George Watson, Dent, 1968.
- (9) Davenant, *op. cit.*, p. 6.
- (10) Blackmore, *op. cit.*, p. 238.
- (11) Alexander Pope, "Preface to the Translation of *The Iliad*" (1715).
- (12) Joseph Addison, "The Spectator No. 419" (1712), *The Spectator Vol. 3*, Dent, 1967, p. 301.
- (13) Edward Phillips, "Preface to *Theatrum Poetrum*" (1675), Spingarn, *op. cit.*, Vol. II.
- (14) Abraham Cowley, "To Sir William Davenant" (1650), "Of Myself in *The Works*" (1668), Cummings, *op. cit.*, p. p. 185-186 に抜粋。
- (15) Richard Graham, "The Poet, in *Angliae Speculum Morale*...." (1670), *ibid.*, p. 201 に抜粋。
- (16) Dryden, "To Lord Radcliffe, Prefixed to *Examen Poeticum*: Being the Third Part of Miscellany Poems' (1693), *op. cit.*, Vol. I, p. p. 160-161.
- (17) John Dennis, "The Grounds of Criticism in Poetry" (1704), *Critical Essays of the Eighteenth Century 1700-1725*, ed. W. H. Durham, Russell

& Russell, 1961.

- (18) Addison, "The Spectator No. 412, No. 419" (1712), *op. cit.*
- (19) Hughes, "Remarks on the *Faerie Queene*," Cummings, *op. cit.*
- (20) John Upton, "Preface to *The Faerie Queene*" (1758), *The Prince of Poets: Essays on Edmund Spenser*, ed. J. R. Elliott, Jr., New York U. P., 1960.
- (21) Richard Hurd, "Gothic Unity in *The Faerie Queene*" (1762), *ibid.*
"Heroic and Gothic Manners" (1762), *English Critical Essays XVI-XVIII Centuries*, ed. E. D. Jones, Oxford U. P., 1965.
- (22) Thomas Warton, *Observations on the Fairy Queene of Spenser*, Gregg International Publishers Limited, 1962.
- (23) *Ibid.*, Vol. I, p. 15.
- (24) *Ibid.*, p. 16.
- (25) Edmund Burke, *A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful* (1757), University of Notre Dame Press, 1959.
- (26) Samuel Johnson, *Johnson's Life of Milton*, (1779-1781), ed. K. Deighton, Macmillan, 1960, p. 69.
- (27) William Blake, "A Vision to the Last Judgment" (1810), "Marriage of Heaven and Hell" (1790-1793), "Letters," *Blake: Complete Writings*, ed. Geoffrey Keynes, Oxford U. P., 1972.
- (28) S. T. Coleridge, *Biographia Literaria* (1817), Dent, 1967. *Shakespearean Criticism Vols. I-II*, Dent, 1967. *The Portable Coleridge*, ed. I. A. Richards, The Viking Press, 1975.
- (29) Coleridge, "Selections from *The Statesman's Manual*," *The Portable Coleridge*, *ibid.*, p. 388.
- (30) P. B. Shelley, "A Defence of Poetry" (1840), *The Complete Works of Shelley Vol. VII*, ed. Roger Ingpen & W. T. Peck, Gordian Press, 1965.
- (31) Blake, "A Vision to the Last Judgment," *op. cit.*, p. 604.
- (32) Coleridge, *The Portable Coleridge*, *op. cit.*, p. 400, p. 406.
- (33) J. R. Lowell, "Spenser" (1875), Elliott, *op. cit.*, p. 39.
- (34) William Hazlitt, "On Chaucer and Spenser" (1818), *Lectures on English Poets & The Spirit of the Age*, Dent, 1967, p. 38.
- (35) Coleridge, *Biographia Literaria*, *op. cit.*, p. 16.
- (36) Coleridge, "Lectures of 1818," Elliott, *op. cit.*, p. 16 に抜粋。
- (37) William Wordsworth, "The Prelude III" (1850), *The Complete Poetical Works of William Wordsworth*, Macmillan, 1950, p. 253.
- (38) Wordsworth, "Dedication Prefaced to the Edition of 1815," *ibid.*, p. 882.
- (39) Wordsworth, "The Prelude XII," *ibid.*, p. 323.
- (40) Spenser, *The Works of Edmund Spenser: A Variorum Edition II*, ed. Edwin Greenlaw, C. G. Osgood & F. H. Padelford, The John Hopkins Press, 1966.

- (41) Janet Spens, *Spenser's Faerie Queene* (1936), Oxford U.P., 1958, p. 58.
- (42) Hazlitt, *op. cit.*, p. 44.
- (43) Leigh Hunt, "A New Gallery of Pictures" (1833), *Leigh Hunt's Literary Criticism*, ed. L. H. Houtchens & C. W. Houtchens, Octagon Books, 1975, p. 420.
- (44) Lowell, *op. cit.*, p. 43.
- (45) John Keats, "An Introduction to a Poem," *The Poems of John Keats*, ed. E. de Selincourt, Methuen, 1961.
- (46) Keats, "A Letter to Bailey" (1(17)), *The Life & Letters of John Keats*, R. M. Milnes, Dent, 1969, p. 45.
- (47) Keats, "A Letter to Reynolds" (1818), *ibid.*, p. 87.
- (48) J. R. Caldwell, *John Keats' Fancy*, Octagon Books, Inc., 1965, p. 19.
- (49) Walter Scott, "Autobiography" (1808), *The Life of Sir Walter Scott*, J. G. Lockhart, Dent, 1957, p. 28.
- (50) Scott, "Review of Todd's Edition of Spenser" (1806), Spenser, *op. cit.*, Vol. I, p. 450 に抜粋。
- (51) John Keble, "Sacred Poetry" (1825), *English Critical Essays XIX Century*, ed. E. D. Jones, Oxford U.P., 1965.
- (52) Charles Lamb, "Last Essays of Elia" (1833), *Essays of Elia & Last Essays of Elia*, Dent, 1965.
- (53) John Wilson, "The Fairy Queene" (1834), Spenser, *op. cit.*, Vol. II, p. p. 369-370 に抜粋。
- (54) Matthew Arnold, "Preface to Essays in Criticism," *The Complete Prose Works of Matthew Arnold Vol. III*, ed. R. H. Super, The University of Michigan Press, 1962.
- (55) John Ruskin, "Theology of Spenser" (1853), *The Stones of Venice Vol. III*, Dent, 1925 に抜粋。
- (56) Ruskin, *The Stones of Venice Vol. II*, *ibid.*
- (57) Spenser, *op. cit.* に夫々抜粋。
- (58) J. E. Whitney, *ibid.*, Vol. I, p.p. 425-426.
- (59) Edward Dowden, "Spenser, the Poet and Teacher" (1884), Elliott, *op. cit.*
- (60) *Ibid.*, p. 59.
- (61) Dowden, "Transcripts and Studies" (1896), Spenser, *op. cit.*, Vol. I, p.p. 498-500 に付記。
- (62) H. E. Greene, "The Allegory as Employed by Spenser, Bunyan, and Swift," *P. M. L. A. Vol. 4, 1888-1889*.